

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（令和2（2020）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 東北大学大学院環境科学研究科（教授・成田 史生）

研究交流課題名 IoT社会を実現するマルチ環境発電材料・デバイス国際研究拠点形成

評価結果（総合的評価）

- |                                  |  |
|----------------------------------|--|
| <input type="radio"/>            | S 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。                    |
| <input checked="" type="radio"/> | A 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。       |
| <input type="radio"/>            | B ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。                |
| <input type="radio"/>            | C 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。 |

所見

申請時には想定できなかった社会状況の激変により、計画実施が非常に難しい中、オンラインツールを用いた積極的なセミナー開催や新型コロナウイルスの問題を解決するためのセンサー技術の提言など、3カ国共同で困難を克服するための施策が工夫されて実施されており、研究者間での密な交流と議論が見て取れる。その成果は当該分野において国際的な評価が高い論文誌への掲載や受賞等にも表れている。参画人数からすると共著論文数や発表数は少ないように思われるものの、国際共著としてレビュー論文をまとめ、書籍執筆にも取り組むなど、現状でできることを拠点全体で取り組んでいる姿勢は評価できる。

若手研究者育成の面では、当初企画していた若手研究者による対面での国際セミナーは2021年度まで実施できていないが、オンラインを利用して交流相手国を含めた若手研究者に対する環境づくりを積極的に行い、その成果として海外研究者との英語による積極的な議論に前向きとなった点は高く評価できる。次年度以降は対面での実施に向けてより多くの若手研究者の留学と積極的な国際交流が企画されており、多くの若手研究者間のネットワーク形成が期待できる。

今後の計画については、特に若手研究者の長期派遣計画が新型コロナウイルスの感染状況に依存してしまうところがあるが、その場合でも数値解析研究を中心とした研究への切り替えを想定しているなど、十分に練られている。研究者間でお互いの実験の様子やデータをオンラインでオンラインタイムに共有するような手法をとるなど斬新な工夫や今後の発展に期待する。